

# 神奈川県現代俳句協会会報

第169号  
令和7年9月発行

## トピックス

川崎・横浜  
合同吟行会報告  
諸家近詠  
サミット短信  
会員新刊案内  
吟行しようよ！  
(3)  
秋の一句



川崎・横浜合同「總持寺」吟行会報告

加賀田 せん翠 記

二〇二五年六月二十七日(金)

吟行地・總持寺(鶴見)

句会場・鶴見公会堂



大梵鐘

ぐずついていた天気も一気に快晴となり、また梅雨も明けていないのに32度を越えるという猛暑の中、52名の参加者の皆様、本当に有難うございました。

總持寺を吟行して句会場に戻る汗・汗・汗の笑顔に頭が下がりました。心より感謝申し上げます。今回は川崎句会・磯子風句会・星川句会・みなどみらい句会の四つの句会による初めての合同吟行会でした。披講・点盛など、初めてですと言いつつも皆一生懸命に取り組まがりました!! とても良い経験になったと思います。一時出句締切。

講演は雨宮葉風氏による『芥川賞・直木賞の選考会をめぐる四方山話など』で楽しい時間があつという間に過ぎました。

進行もスムーズで四時少し前に閉会となり懇親会へ。近くの養老の滝で盛り上がりました。皆様本当にお疲れ様でした。

入賞者(一位〜二十位まで)

仁王の目朱夏のまん中射ぬきたり

風涼し長き廊下を目で磨く

炎天を寺へ私の影がない

千年の森千年の樟若葉

白南風やうなじ幼き修行僧

總持寺のここが浄土の蝸牛

夏萩や禅僧ひとりひき返す

梅雨雲を押し破りたる巨利かな

夏安居の廊下を風の渡りけり

みがかれし百間廊下蟻の行く

青葉光百間廊下射抜きたり

片蔭を拾ひて参る大本山

境内は別の明るさ梅雨の蝶

ゆるめれば汗の吹き出す仁王像

喉を灼くジャックダニエル裕次郎忌

群生のクローバーの中僧が行く

若くしてこの落ち着きや梅雨の僧

鳥揚羽闇よりも濃き翅開く

もどかしい風を日傘に入れてやる

緑風に磨かれ總持寺長廊下

齊藤佳代子

町野 敦子

桐山 芽ぐ

芳賀 陽子

釜田 二美

三沢 容一

平田 薫

雨宮 葉風

尾澤 慧璃

金栗トモ子

佐々木重満

岡田 翠風

川島由美子

松田 圭子

中嶋 秀二

安田 淳子

原田 敦子

杉 美春

なつはづき

吉居 珪子



写真上：雨宮葉風先生



写真下：会場風景

新会員紹介欄

はつなつ 加藤 西葱 (無所属)

花は葉に橋に橋の名と川の名  
駅に名を止むる遊園夏つばめ  
かくて世は右へ右へと薔薇の坂

諸家近詠(到着順)

里の冬 木下 研作 (無所属)

冬日差す枯露柿の影古座敷  
天日干す大根棚や三浦浜  
殻をよけイチョウ並木や冬日向  
しおりにと桜紅葉や日暮坂

春の咳 鵜飼 教子 (あかざ)

雛の間水の重さの赤子抱く  
疑はぬ顔証や春の咳  
白米のニキロの重さ町薄暑  
癒ゆる身に小豆の甘し迎へ梅雨

草の花 川野ちくさ (蚕)

肩肘を張らぬ齢や夕花菜  
濁りなき惚けの瞳梅雨晴間  
出来立ての服の温もり草の花  
アボカドの種真つ二つ寒波くる

季節の心 宮永 武彦 (天晴・形象)

駄菓子屋のザルに落花の二三片  
一枚の水の流れの金魚かな  
入りてなお空深く染め秋の日は  
夕空の色を重ねし落ち葉かな

肺炎 劔二 (無所属)

病窓は虚ろな鏡初日の出  
くちなしの香にいざなはれ女学院  
尺八のしみ入る書写山法師蟬  
肺炎で一切が無為年用意

父の揚羽 川島由美子 (歯車)

息を止め雛の髪を整える  
盆近し父の揚羽が現れる  
藤袴話しはじめはふつくらと  
裏山の木々大寒の深眠り

金婚式 細貝 昭吾 (朱夏)

甘茶仏乾きかけては人が来る  
山吹や遅れがちなる二人連れ  
ほの甘く炊けて金婚栗おこは  
冬に向かつて昭和の快男児

ちゅん 猪狩 鳳保 (陸・月鳴)

くちばしの輝き初むる初山河  
行水や雀分けゆく草隠れ  
ぼそぼその雀の胸毛残暑かな  
朝まだき朽葉を飛ばす庭雀

腹切る前 石鏡 優 (無所属)

実南天腹切る前の一句かな  
莞爾としてけやき大樹や冬夕焼  
キリンになり皇帝ダリアを抱いてやる  
寒菊の海へ泳ぎにゆくと云ふ

山桜 川村智香子 (顔)

嬉嬉と咲き鬼気と散るなり山桜  
火の色ひなげし咲くや晶子の忌  
野火止めや紅葉の焰止められず  
降誕祭メタセコイアに星の降る

過去 山田ひかる (山河)

梅ふむ奥歯に過去が鎮座して  
濃紫陽花白血球が目詰まりす  
蟋蟀の触角ほどの塩加減  
八割方忘れるための日記買う

律の記憶 菅原 若水 (小熊座・輪)

雪解水こころを解き村ほどく  
因習のがんじがらめの暑さかな  
八方の闇を濃くして鮎落つる  
鬼籍とは戸籍の続き冬の草

日々一句 佐々木光野 (玉藻)

花嫁に遠き出張春疾風  
夕焼けに出せぬ一句をしまひけり  
白露や遠き机の辞書重し  
俳句とはともに居る日や去年今年

木叩き 水島すすむ (無所属)

猫の日の猫よく眠る春の雨  
木叩きの庭木鳴らすや明け易し  
大谷の同じ時空にゐる九月  
湯豆腐のくづれて後期高齢者

喉笛 加藤 三眠 (無所属)

行く春に取り残されし物思ひ  
天国は心の中に月見草  
神木の千年杉や天高し  
猫湯湯婆夢の国へと誘はれ

若葉風 吉居 珪子 (無所属)

蝶と蛾と人種差別の残る世と  
若葉風吸って余生を充電す  
風の指揮アルトの輪唱花すすき  
枯葉踏み呂律の音階生れけり

赤い薔薇 中岡 昌太 (朱夏)

三・一は一はや・もう・まだと呟きぬ  
ことばの暴力赤い薔薇が崩れた  
悔いあまた吐くためにゆく大枯野  
パキパキとセロリ喰つて詩を書いて

世道人心 岩田 信 (無所属)

梅一日置いてきたもの置いたまま  
夏草や老老介護の終わるとき  
知るとなお知りたくなりぬ秋の草  
長生きは一長一短年の暮

シーグラス 大本 尚 (あすか)

壺焼の傾ぎて海をこぼしけり  
星涼し砂にきらりとシーグラス  
長き夜や隣にページめくる音  
雪に雪重ねてみちのおくの黙

座禅草 北村 量子 (ロマネコシイダシマ)

よく笑い寂びぬ生き方座禅草  
八月の形状記憶生きたとは  
萩月夜心の凝りの脱皮中  
平和とはガラスの聖樹の乱反射

長寿 小林ひろこ (青芝・顔)

罪背負ふ長寿と在りて日の永し  
蜘蛛の囀を抜け姥捨ての道の上  
百舌の贅長寿は日毎乾きゆく  
静けさや笹に雪降る音しきり

梅 平山 圭子 (海原)

梅一輪歩む力を貰いけり  
気掛りな夏の地球の骨密度  
正論を説く君寂し罌雲  
ポケットをもて余して冬服

サミット短信

辻堂句会

第三十回

於・明治市民センター  
令和7年6月28日

草いきれ青春という不発弾  
少年の真つ直ぐな声沖縄忌  
絵手紙に色加えれば枇杷熟るる  
ガガンボハ 女身トナリテ 窓叩ク  
間違わぬように芽の輪をくぐりけり  
明易し部屋中音が満ちてくる  
すたり立ち小雨が似合う花菖蒲  
ぱつと見の美人か私未央柳  
老鶯の尖りし自我を持て余す  
炎帝を睨む仁王像に孤独  
お中元息災知らせる明太子  
夏帽子骨の髓まで昭和びと  
青芝にゴロリ天空無限なり  
千枚田未完の植田六百枚  
水槽に目高の遊ぶ草を足し  
一片の雲に始まる麦の秋  
海牛の思考置き去り虹二重  
不定愁訴例えれば振り花  
蓮咲くや今朝の便りはこれにする  
拳大やつとメロンの体をなす  
第三十一回 令和7年7月26日  
病室で膨らまず子の浮き輪かな  
八月の記憶にラジオの雑音  
ナスキュウリヒトも萎れる半夏生  
蓮開く池の回りを律の風  
くたびれしシャツもうなだる梅雨の明け  
雲の峰生きるも死ぬも神の手に  
ネジはずすように朝顔いま咲きぬ  
手作りの灯籠流す幼き手  
十葉か親の小言か格言か  
奥村 純子 報  
藤方さくら 平山 圭子  
田畑ヒロ子 伊藤 梢  
岩田 信 占部美土子  
樫村 弘子 長島喜代子  
野口美穂子 長谷川昭放  
廣田 洋一 星 由江  
吉田 典子 若林つる子  
渡辺 正剛 奥村 純子  
令和7年7月26日 渡部 陵子  
藤方さくら 柳 蒼柳  
田畑ヒロ子 安藤 靖  
伊藤 梢 岩田 信  
占部美土子 樫村 弘子

苦しみを詠えば恨に敗戦忌  
傾国の女の夢かな花木蓮  
夏休み人手不足のレジの列  
少年のポケット満杯夏盛り  
世を拗ねて辛さ増しけり夏大根  
七夕や願いはひとつ平和なり  
水替えて泡を放てり水中花  
一日の終わりの鏡髪洗う  
みずみずしい敗北の汗振り散らす  
夢幻でも会いたきひとや迎え盆  
家蜘蛛は本は読め読め書棚から  
花は褪せ雨に冴え冴え四葩の葉  
◎連絡先：事務局佐藤久まで  
金栗トモ子 佐々木重満  
田辺かつら 中村まさえ  
長谷川昭放 平山 圭子  
廣田 洋一 星 由江  
吉田 典子 若林つる子  
渡辺 正剛 奥村 純子

みなとみらい句会

第四二五回

於 フォーラム南太田  
令和7年7月6日

一粒の麦白黒つける煙あり  
老鶯のしきり白虎隊の墓所  
空白の心を埋める夏の風  
白々しいお世辞が焦げて大夕焼  
本心は悟られまいぞ白日傘  
網戸してこの世のこぼれ話聞く  
明日葉や気象予報士下駄抛る  
告白の殻が落ちてる夏の浜  
落花生洗う房総の土黒き  
少年の淡き初恋萩の声  
鯖鮎や貴船の水の迅き流れ  
幸運を掴み損ねし流れ星  
赤とんぼ真つ直直な風が好き  
落款の少しうすれし今朝の秋  
反戦で張りのある声生身魂  
足音の近づいてくる敗戦忌  
菅原 若水 報  
里見 美季 菅原 若水  
関根 洋子 田辺かつら  
長島喜代子 芳賀 陽子  
藤方さくら 細貝 昭吾

第四二六回

令和7年8月9日

少年の淡き初恋萩の声  
鯖鮎や貴船の水の迅き流れ  
幸運を掴み損ねし流れ星  
赤とんぼ真つ直直な風が好き  
落款の少しうすれし今朝の秋  
反戦で張りのある声生身魂  
足音の近づいてくる敗戦忌

陽をはじく地産地消の秋茄子  
語り部は子らが継ぎたる原爆忌  
天からの招待状か落し文  
物價高落穂拾いにでも行くか  
◎連絡先 菅原若水 s-shinya@6.dion.ne.jp  
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」  
をお送りいたします。

星川句会

七月

令和7年7月14日

金栗トモ子 報

一行の巨大な願い星祭  
句友等の飄々たりし浮いて来い  
私だつて空を飛びたい立葵  
甚平に着替えてよりの好々爺  
蚊遣火ぐるり忘却がその中に  
金魚玉神のごとくに眺めをり  
夜を耐えて待つはさえずり朝の涼  
空洞の中から水着波砕け  
礼文島エゾカンゾウに乗つ取られ  
老骨にムチ等打たず葛桜

八月

令和7年8月6日

じゃんけんのパーで木耳跳んで出る  
その道とのつきあい長し猫じゃらし  
老いてもや鼻歌まじり桃を剥く  
とこてん祖母のやさしき論し方  
コーヒ一の苦味和らげ初嵐  
四捨五入出来ぬ昭和のサングラス  
それぞれの地方自慢や夏休み  
天を衝く蟬の声消す知らせかな  
平飼いの鶏の夢見る夏銀河  
打ち水にジュワツと聞こゆ地の呼吸  
蟻の列前進のみを許されて  
◎毎月第一月曜日 星川駅下車「かるがも」また  
は「アワーズ」で開催。  
◎連絡先：事務局佐藤久まで

丹沢句会

五月

順不同・秦野市西公民館

竹村 半掃 報

翡翠の青一瞬の逃避行  
余り苗右往左往の米奉行  
なで肩の山を並べて奈良若菜  
麦秋や昭和に池田・岸・田中  
雨季乾季 書物ノ奥ニ船沈メ  
合飲の花手触りやわき風来る  
田水張る米騒動のミステリー  
いのなかのかわずすくうてだしてやり  
雨音が句読点かな若葉風  
薫風や少しカッコよくなれる  
繋がりし生命の糸や蛍舞う  
ほととぎす一声闇を動かせり  
仲裁の隔靴搔痒水喧嘩  
インターの歌声遙か藤揺れる  
遠近にサーファーの群卵波立つ  
帆を下ろす漁船ゆらゆら卵波かな  
サイゴンに渦巻くようにバイク 夏  
しつけ糸抜いてとび出す夏の娘よ  
余花といふ思想 ホセ・ムヒカ逝く

六月

須田 聡子

生も死も空を泳いでゆく金魚  
お参りに行くだけの道滴りぬ  
話しする金魚であればうるさそう  
日雷身の振り方を再起動  
気候変動きつと咲く半夏生  
甚平着てあれこれそれで足る暮らし  
穀象が這い寄り叫ぶ米をくれ  
南瓜の雌花抱きしは風の名もなき日  
AIもアラートを出す梅雨の月  
遠雷やウルは海辺の都市なりき  
鷺草ノ鷺ニ憑カレシ素肌カナ  
夏帽子脱ぎしなやかに国歌の列

ポケットからよれよれハンカチ燕子花  
ゆうひうけふたりでつんだえんどうまめ  
クーラーにかけ込み羽化をしていたる  
虎を野に放ちしは誰走り梅雨  
鳥籠は何年も空夏静か  
また少し地軸傾く炎暑かな  
時鳥古古古米は此処に無し  
冤罪のひとつやふたつとこてん

七月

菅沼とき子

とこてんもやもや胃の腑の在り処  
夏の雲付点音符を引き摺りぬ  
氷水ぬり絵の少女はおちよぼ口  
トランプの頑な土壌 熱帯夜  
蝉捕る鉄腕アトムや焦土跡  
一弦の緩んでいたる猛暑かな  
青蜥蜴寝ぼけているよ鉢の底  
唐揚屋に長い行列梅雨明け  
梅雨明けてすだちは海の音にいる  
鳥唄にすすむ泡盛時忘れ  
菓子なべて甘さひかへめ巴里祭  
地球出水令和の方舟誰が乗る  
りよくいんにいのちがおくれてはいりくる  
抽出しに溜めるうっ憤夜の秋  
黒揚羽真つ赤な花の蜜を吸う  
目から鱗といふて冷さうめん  
◎連絡先：長谷川昭放  
電話 080・5013・6618  
Kumonomine100k@mk.scn-net.ne.jp

川崎句会

七月

山田ひかる 報

冷房やふたりの主張ゆき違ふ  
泰平を揺るがす蚤を取り逃がす  
緑さす鏡のごとき青い池

夏料理グラスに透ける食前酒 植田いく子  
 スニーカーじゃぶじゃぶぬれて夏河原 甲斐 泰子  
 海の日や多めにつくる塩むすび 加賀田せん翠  
 うっかりと出番忘れた梅雨かな 斎藤佳代子  
 水泳大会天と地獄はタッチの差 佐藤 鈴代  
 向日葵や日本生れの絵文字です 佐藤 廣枝  
 夕星に時おり響く遠花火 佐伯 悦子  
 美文字から声が聞える夏便り 白井千代子  
 美しき生き方学ぶ半夏生 菅原 若水  
 子が指を差すや青田に風見つけ 関戸 信治  
 こまごまと差配の指図夏祭り 花澤ちいこ  
 家計簿の一筆欄へ梅雨明け 三沢 容一  
 読み難き卒寿の文字の夏便り 吉居 瑠子  
 河鹿蛙円空仏の面構え 山田ひかる

八月 令和7年8月16日(土)

短冊に平和の文字や七夕祭 青島 哲夫  
 盆波にほどよき距離のテラス席 麻生 明  
 緑陰のそよそよ吹くや太極拳 安藤 均  
 でこぼこは森のかからか青りんどう 甲斐 泰子  
 過不足はあれどひとまわずかき氷 加賀田せん翠  
 銀ブラを死語にはさせぬと夏柳 佐藤 鈴代  
 夏草に埋もれておりぬあの記憶 佐藤 廣枝  
 八月の式典八十年目の献花 佐伯 悦子  
 夏の夜や駅ピアノから「花は咲く」 白井千代子  
 今は亡き父母のなれそめ盆踊 菅原 若水  
 阿波踊りのろまな奴の足捌き 関戸 信治  
 秋天に手を振るやうに窓を拭く 花澤ちいこ  
 永遠に戦後を語る敗戦忌 三沢 容一  
 敗戦日忘れぬ世代黙禱す 吉居 瑠子  
 かなかなや二の足を踏む墓じまい 山田ひかる  
 ◎連絡先：事務局佐藤久まで

インターネット句会

宮永 武彦 報

五月

「余生」と言ってみただけ山椒魚

岩田 六川

幸せも売りし花屋や春灯し 瀬古 修治  
 牡丹には羽目外したき時もあり 須藤 節子  
 芍薬の白生き生きと夜を点す 江原 文  
 みどりの地球に寿命あるらしき 金栗トモ子  
 血を吸ふは雌のみと知り蚊を打てず 菅原 若水  
 初夏の会釈をかはず守宮かな 石鎚 優  
 なんにでもなれると育つアマリス 光田久美子  
 夏燕設計図には無き軌跡 佐々木重満  
 あのわたがし買つてとねだる夏の雲 多久島重宏  
 身のうちに乾く音あり麦青む 渡辺 順子  
 はつなつの空海のを山のを 柳 蒼柳  
 苺には母の字ありて逢ひたくて 遠藤 美緒  
 雨が好きになつたきつかけ一番茶 桐山 芽ぐ  
 野あやめのちよつと黄色な時間でした 平田 薫  
 高座から届ける笑ひ夏羽織 町野 敦子  
 酒蔵のぼうふら見つめる左きき 石川 夏山  
 碧・青・ブルー空も海もネモフィラも 吉村 元明  
 春愁の形は四角三角× 麻生 明  
 桜桃忌文机にある傷数多 宮永 武彦  
 六月

眠剤の喉にとどまる五月間 江原 文  
 四つ葉のクローバー風をいっぱい持ってきた 平田 薫  
 掬ふ水青く匂へり初螢 吉村 元明  
 江ノ電の日常をゆく非日常 遠藤 美緒  
 籐椅子に猫の寄り添ふ眠りかな 瀬古 修治  
 父の日や深きへこみの椅子ここに 光田久美子  
 頬杖の片方の闇太宰の忌 金栗トモ子  
 一枚の水面を破る緋鯉かな 町野 敦子  
 裏山の老鶯もはやしやがれ聲 多久島重宏  
 老木の伐採マーク蟬生る 岩田 六川  
 ミスターは永久に不滅ぞ子規鳴きぬ 柳 蒼柳  
 夏野抜けわが青春は終はりけり 菅原 若水  
 あぢさゐのはだかを雨がつよくうつ 石鎚 優  
 年寄り初めてなのです冷奴 石川 夏山  
 花柘榴業の炎の立ちし空 佐々木重満

ゆつくりとカフェオレ飲みて虹を待つ 須藤 節子  
 岩間より水流れ落つ夕涼 宮永 武彦  
 七月

丹田に言霊入れて祈る夏 金栗トモ子  
 夏蝶の木の間の闇に吸われけり 瀬古 修治  
 AIに囲まれ朝のトマトジュース 渡辺 順子  
 梅雨明けでどこへも行かず日曜日 遠藤 美緒  
 漆喰の壁のでこぼこ夏怒濤 町野 敦子  
 嫌はれることなどとんとなめくじら 多久島重宏  
 手花火や向ひ合ひたる臍ふたつ 石鎚 優  
 子規の鳴くテツペンカケタカ名句カケタカ 柳 蒼柳  
 ほうたるとなりて友垣たなごころ 吉村 元明  
 蟬の日を全うすべく遠音隣り風 石川 夏山  
 風鈴のささやく遠音隣り風 木下 研作  
 蜻蛉やからだはちいさい宇宙です 平田 薫  
 踏み込めば飛び交う命草いきれ 桐山 芽ぐ  
 蓮咲くや深層の闇を裂きつつ 佐々木重満  
 テント屋台の荷ほどき待つや初浴衣 光田久美子  
 経験者の頭でつかちスイカ割 岩田 六川  
 生御魂百越え二歳の零戦士 須藤 節子  
 百年の平和は未達茄子の花 麻生 明  
 夢はみなハッピーエンド簞 菅原 若水  
 ゆらゆらと水を踊らす金魚かな 宮永 武彦  
 ◎どなたでも。参加者募集中。登録・参加は無料。  
 (初回参加はアカウント作成が必要ですので、お  
 問合せください)  
 連絡先 宮永武彦 takehikom0410@gmail.com

磯子風句会

尾澤 慧璃 報

五月

於横浜市社会教育コーナー  
 令和7年5月28日  
 ダンサーの鎖骨のくぼみ夏灯 鹿又 英一  
 沖繩忌褌せしフェンスと注意書き 岩田 六川  
 静けさや青水無月の竹の里 川野ちくさ  
 晩年の旅のポンポンダリアかな 長濱 藤樹

梅雨寒やゆつくり開く紅茶の葉  
池田恵美子  
麦飯のお代わり自由窓青葉  
佐藤 久  
バレリーナの鎖骨のくぼみ薄暑光  
藤田 ゆい  
老猫の背中がピクン吊忍  
辻内美枝子  
見物の髑髏のタトゥー荒神輿  
尾澤 慧璃  
手羽先の骨の山盛り生ビール  
瀬崎 良介

七月

令和7年7月23日

バス待ちの片陰の列乱れたり  
岩田 六川  
明易の羽目はづしたる男かな  
藤田 裕哉  
普段着の赤羽土用鰻の香  
川野ちくさ  
羽づくろふ音のかすかや夏の鴨  
鹿又 英一  
シヨーケースの畳めぬ翅や兜虫  
藤田 ゆい  
行列のできるドーナツ鴉の子  
藤田 裕哉  
ジーンズに羽織る形見の夏羽織  
池田恵美子  
羽目板の木目の渦やバンガロー  
尾澤 慧璃  
置き土産の羽一本や夏の庭  
田辺かつら  
手土産の父の朝採りトマトかな  
桐 まり花  
青蔦や週末だけのピザの店  
佐藤 久  
夏休みうさぎの一羽残りけり  
辻内美枝子

◎会場 横浜市社会教育コーナー研修室C

(JR磯子駅より徒歩4分)

◎日時 奇数月の第4水曜日 13時〜

◎連絡先 尾澤慧璃 KingLovestea@gmail.com

金八句会

杉 美春 報

七月

じつとりと下着吸い付く夏の朝  
村上 裕也  
果てしなく小さきちんぽこよ茄子の子よ  
石鎚 優  
炎昼の負けぬ太郎の美術館  
神谷 純子  
打水すそれからふたつ盛塩を  
栗林 浩  
梅雨明や声の混みあうサラダバー  
なつはづき  
みちのくの水に磨かれ冷奴  
松浦 泰子  
麦わら帽手足の長き女の子  
中村 光男  
ひいふうみい逢うまでの日を百日草  
里見 美季  
航海図しるす船長星涼し  
扇 義人

青葉風ゴリラの鼻はハート型  
尾澤 慧璃  
夏野菜水にそれぞれの浮力  
杉 美春

八月

病葉や長蛇の列のしんがり  
神谷 純子  
鍵つ子やバナナ刺しても曲がっている  
なつはづき  
鳥渡る白い寺院の丸い屋根  
栗林 浩  
ダンベルの軽きを選ぶ厄日かな  
杉 美春  
半月の溶け出してゐる熱帯夜  
佐藤 久  
施餓鬼会の読経の海を泳ぎしと  
石鎚 優  
花街の簾に微風 昼下がり  
松浦 泰子  
桔梗や仮名のことばで考え込む  
里見 美季  
月涼し庭のどこかに埋蔵金  
尾澤 慧璃  
屋外の生温かきプールかな  
村上 裕也  
浴衣着の星空観察山の宿  
扇 義人  
赤富士を仰ぎて齧る冷し桃  
中村 光男  
◎毎月第二金曜日 夜8時より。ZOOM使用。  
第二水曜日 出句締切、事前投句

◎連絡先 杉美春 niharusugi@jcom.home.ne.jp

湘南サンシャイン句会

堀口みゆき 報

於・藤沢市民活動推進センター二階会議室

六月 6月6日(金) 一時

ぐいと干すペットボトルの新茶かな  
青木 敏行  
十葉のにおい許せし花白く  
青柳 白芳  
風さつとお堂の裏に夏野あり  
安藤久美子  
六月やふあふあもくもくけむりの木  
荻野 樹美  
石庭の語る哲学苔の花  
金栗トモ子  
カヤツリ草裂ケバ ムコウハ 夜ナリキ  
芳賀 陽子  
脈絡のなき話なり木下闇  
日置 正次  
荒梅雨や指にまつわるオブラート  
保里よし枝  
心療内科どくだみに囲まれる  
馬来まち子  
赤べこの首振る午後や風涼し  
みほ はな  
白玉食ぶ重きもの皆手放して  
山口 愛子  
筋肉の話などして心太  
山下 遊児  
汗たらり気づけば女性専用車

サングラス意思の絡まる自由かな  
吉田半夏生  
涅槃図や佛の世界も近くなる  
渡辺 正剛  
緑さす甲骨文字の深き彫  
堀口みゆき

七月

7月4日(金) 一時

迷い込んだ水母この水合いません  
安藤久美子  
河骨は三つの池の真ん中に  
荻野 樹美  
パリー祭スクランブルエッグ大盛  
金栗トモ子  
肉厚の入道雲立つわたくし忌  
日置 正次  
振り返るにはまだ若い青葉冷え  
保里よし枝  
半夏生骨を失くした深海魚  
みほ はな  
吾の骨は誰が拾うの冷やっこ  
山口 愛子  
遠ざかる逆縁の人白日傘  
山下 遊児  
登山せり膝の軟骨磨り減らし  
吉田半夏生  
海側の座席にすわり海を観る  
渡辺 正剛  
寺裏は裏の裏なり著莪の花  
堀口みゆき  
つぎつぎと蛍袋に詰めし夢

八月

8月1日(金) 一時

出目金の黒翻へるハイファッション  
青木 敏行  
米売り場監視カメラの溽暑かな  
青柳 白芳  
蟬採りの子を引き寄せる大樫  
荻野 樹美  
雲の峰浮沈の果ての余生かな  
金栗トモ子  
蟬の声止むや手のひら開かれて  
佐々木重満  
月光ニ浮ク神々ノ 水浴図  
芳賀 陽子  
凌霄花浮力のつきし思考力  
日置 正次  
追伸を二回も書いた鳥渡る  
保里よし枝  
浮輪ぶかぶか憧れはあの水平線  
馬来まち子  
鳥声の森の奥なる落し文  
みほ はな  
蜜豆や君が私についた嘘  
山口 愛子  
ひきがへる肩の力を抜いてみよ  
山下 遊児  
傾ぎてもやがては戻る神輿かな  
吉田半夏生  
咲き出して止まる刻なし百日紅  
堀口みゆき  
凶と出た今日にするかな暑気払  
◎毎月第一金曜日、通常の句会場は藤沢市民活動推進センター。

◎連絡先 堀口みゆき

090 3914 0568

email miyuhorriguchi@yahoo.co.jp

## 会員新刊案内

なつはづき句集『人魚のころ』を読んで

栗林 浩 記

この第二句集の題名がいかにもメルヘン的である。第一句集『びったりの箱』の時期を彼女は〈少女期の果ててメロンのひと掬い〉のように定義している。若さ満々の句集であった。第二句集では〈髪洗う人魚のころを思い出す〉のとおり、同じく青春回顧の時代にあたると思われる。つまり、この二つの句集は彼女の人生の同時代に書かれたものといえよう。好きな句を挙げてみる。

切手貼るさつき小鳥がいた場所に

蛇いちご母をまつすぐ見られぬ日

底紅や髪解くように人許し

髪切つて人魚をやめる青水無月

水を打つふいに寂しきピアス穴

二句目はテレビの俳句番組で、選者の全員から特選を貰った句である。甘酸っぱい青春の残滓に皆が共感を示したのであった。

ここで、青春を代表するであろう題材「恋」を詠んだ彼女の句を見てみよう。第一句集には、

さつきまで恋をしていた水着脱ぐ

片恋や冬の金魚に指吸わせ

など九句あり、その「恋」の中心に自分がある。

第二句集では、次の句を含む七句がある。

香水瓶並べて恋は目分量

失恋や脚の足りないずわい蟹

まなざしに恋の餓えあり水面鏡

九句と七句だから、変化したとはいえないが、ここでの「恋」は第三者的に詠まれている。このあたりに彼女の変化があるのかも知れない。彼女の青春残香句がまだまだ続くような気がするし、そう願いたい。早成しないで欲しい。

(朔出版 二〇二五年六月二十二日刊)

平田薫句集『縷紅草』によせて

つはこ 江津 記

俳句集団「つぐみ」を共に起ち上げ、切磋琢磨してきた盟友の初句集の上梓を心から慶びたい。

「一冊くらい句集を出しておきたいと考えるように」なったと〈あとがき〉に認めてあるが、長い時間をかけて溜まったものが発酵しおのずと溢れ出るように、満を持しての刊行である。共に40代後半からの晩学のスタート。爾来30年、あれこれ憶い出しながらの句集逍遙となった。

さまざまな葛藤・試行を経て、「俳諧自由」を手中にし、「自由に自分を書いていいのだ」と得心し解放された氏は、万物を・自分を高い空に抛り投げるように生き生きとしなやかに俳句表現を進化させてきた。ことばの多様多彩な表現、時に眩惑される不思議さの根っこには、自らの全存在(肉体と五感+α)で掴み取った実の世界、自然や社会へのリアルな感情と思想がある。

氏の俳句世界の基盤を成すのは彼我一体の世界観である。荘子の万物斉同に通ずるが、万物は等価であると共に、彼は我であり我は彼なのである。

黒揚羽沼を一瞥して帰る

一日を山であそんだ臃かな

木と別れ水をはなれる春の風

どの句も人間と黒揚羽や臃や春の風は等価であり、一体のものとして捉えられている。「沼を一

瞥して帰る」のは人でありかつ黒揚羽なのだ。それは修辭を越え抜き差し難いほどに一体なのである。そう捉えると一見難解と思える句も分つてくる。

山茶花のふつと散つたりぎゅつと咲いたり

また僧がひとり素足の冬の僧

オノマトペの多用や言葉の畳みかけも自らの身体感覚ゆえなのだ。紙幅が尽きたが、最後に、好きな句をふたつ挙げて短い所感の仕舞いとする。

藪蘭の寂しきは雨降ってくる

烏にも二月恋などありぬべし

(現代俳句協会 二〇二五年夏 刊行)

## 吟行しようよ (第三回)

「大雄山最乗寺」

長谷川昭放

六百年の歴史と自然が織りなす荘厳な世界、大雄山最乗寺は曹洞宗の寺院です。開創につくした五百人力の弟子「導了」にちなんで「導了尊」とも呼ばれています。アクセスは小田原駅↓大雄山駅(21分)↓バス導了尊入口(10分)。車では大井松田インターから20分、駐車場は250台あり無料です。遠方の方は小旅行気分でも如何でしょうか。

信徒会館では予約をしておけば精進料理を味わうこともできます。料理は二千円で何故か正味一合の般若湯がついて来ました。会館では五十人規模の句会も可能です。

さて、境内は鬱葱とした杉の巨木に覆われ、真夏でも涼しく、数多の堂塔が祀られ、靈気に満ちています。自然も豊かで「洗心」と命名された滝

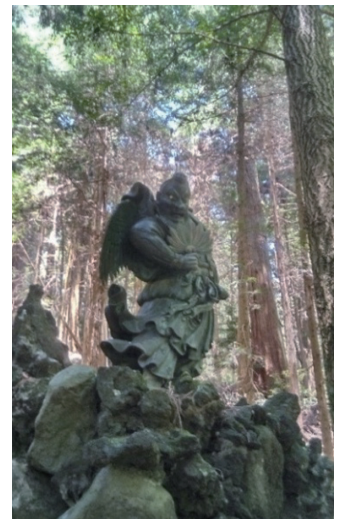


写真上：本堂  
写真下：和合下駄

もありません。季節の花木は桜、藤、著莪、紫陽花、ウバユリ、万緑、紅葉、落葉と続きます。さて、さて、私は結界門をくぐり只管、奥の院を目指しました。なんと奥の院へ続く階段は三百五十四段、見上げただけで、心不全と不整脈が悪化しそうで、見事に挫折。この日の吟行会では、小春空脚ガクガクの奥の院、白水溟舟の句が第一位となりました。

その後、気を取り直し本堂を訪ねました。大伽藍は出入り自由、私は一人胡坐を組み、瞑想に耽りました。、本堂はパワースポット小春かな、の一句を得ました。この他に赤い高下駄が所狭しと置かれている場所がありました。「和合下駄」と呼ばれ、夫婦円満、和合を祈願したものです。残念ながら現在は場所がなくなり奉納の受付は終了しています。

更に天狗の像の多い事に驚きました。導了尊者が天狗の姿になって寺建立に尽力したことが由来です。天狗は最乗寺の守護神なのです。



天狗像  
写真撮影：長谷川昭放

秋の一句



(写真：里見美季)

舞ひ果つる巫女にほほむ玉兔かな	猪狩 鳳保
スケボーびたびた夕陽の秋の海	町野 敦子
新涼や解体新書の復刻版	たむら 葉
初秋がきて語り部となる戦中派	日置 正次
遍歴の反故のト把画室秋	横川はっこう
夕空の色を重ねし落葉かな	宮永 武彦
身の内に天の川あり渡らむか	石鎚 優

II 地区動向・消息 II

1. 6月13日(金) 拡大幹事会 31名参加  
俳句大会第一回実行委員会、他
2. 6月27日(金) 總持寺吟行会 52名参加  
川崎・横浜地区句会合同主催/於鶴見公会堂
3. 9月9日(火) 副会長会議  
45周年記念行事の方針検討、他
4. 9月9日(火) 拡大幹事会  
俳句大会第二回実行委員会、他
5. 9月23日(火) 初心者講座(川村智香子講師)

第一回/以降第四火曜日・全五回

6. 新会員紹介  
《正会員》 樹石(鎌倉市)

田辺かつら(横浜市) 森 有沙(藤沢市)

《会友》 内田ゆり子(横浜市)

桐まり花(横須賀市) 小沢説子(横浜市)

7. 会員動静

富山ゆたか(住所変更) 相模原市

大塚真紀(住所変更) 横浜市

高越研次(排名変更) 旧・たかごし十合

8. 逝去謹悼

平野セイユウ(小田原市) 令和七年二月

《編集後記》

◎諸家近詠に関するお願い

諸家近詠用の投句葉書を作成し、6月の会報168号に同封しました。ご確認の上、10月末日までにご投句ください。投句葉書を失くしてしまったり方は、官製はがきでも結構です。その場合は、四句記入し、編集人宛にお送りください。

◎会報170号では冬の一旬を募集します。

11月20日締切です。投句・投稿は編集人まで。

発行所 神奈川県現代俳句協会

発行人 芳賀 陽子

編集人 杉 美春

〒252・0325

相模原市南区新磯野4-4-11506

電話 090・6534・1452

Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp

事務局 佐藤 久

電話 090・6587・0113

Eメール hisashi36@fj9.so-net.ne.jp

印刷所

(有)湘南グッド

